

たそはね



止しているニジモンサビカミキリ
(縄本島久手賢, 1979年4月20日, 伊藤弥寿彦撮影)

No. 5

1980年6月

齊藤秀生：群馬県武尊山の <i>Pidonia</i>	1
神田英治：北海道の <i>Pidonia</i> (ヒメハナカミキリ属) について	9
新里達也，高桑正敏，齊藤秀生：日本鞘翅目学会第3回総会レポート	13
平山洋人：日本鞘翅目学会第4回総会レポート	16
穂積俊文：第3回・名古屋支部例会記	18
穂積俊文：第4回・名古屋支部例会記	19
会 員 動 静	20
会からのお知らせ・ご案内	24
収 支 決 算 報 告	25

表紙題字：畑山千枝 表紙写真：伊藤弥寿彦

群馬県武尊山の *Pidonia*

齊藤 秀生

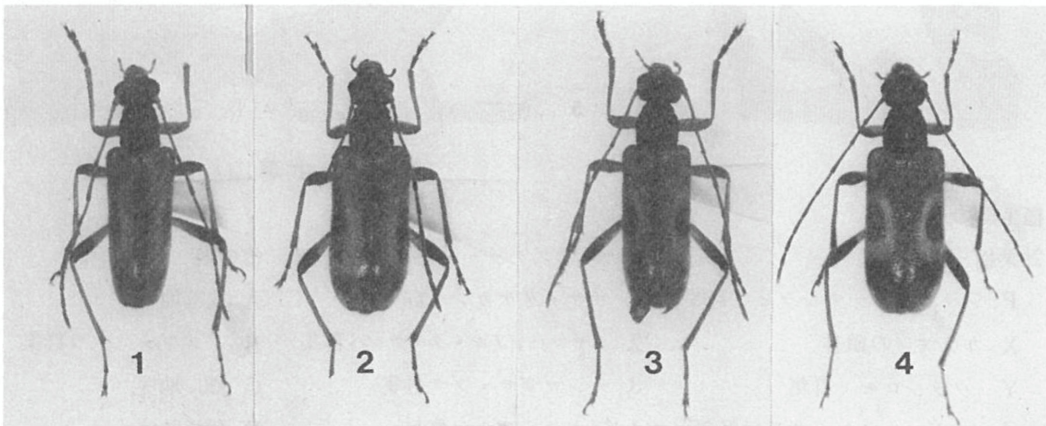
上州武尊^{はたか}は、その興味あるカミキリ相から、関東のカミキリ研究者はもちろんのこと地方の研究者にまで一目おかれている地域である。武尊山は日光地方に近く谷川連峰にも近接しているが、地形的には日光白根山からも谷川連峰からも独立している特異な山である。したがってカミキリ類においても注目すべき種がいくつかあり、オオホソコバネカミキリ *Necydalis solida*、クロホソコバネカミキリ *N. harmandi* を初めオオハナカミキリ *Anoplodera granulata*、セアカハナカミキリ *Leptura thoracica*、コヨツスジハナカミキリ *L. subtilis* といったブナ・カンバ類にそのHostをもつ種が多産し、マダラゴマフカミキリ *Mesosa poecila*、コバヤハズカミキリ *Mesechthistatus binodosus*、アガガネカミキリ *Plectrura metallica* などの他地域では少ない種の記録も多い。

ところが現在まで武尊山のカミキリについてまとめられているものはほとんどなく、藤田(1971)などに見られるのみであり、他には採集記録程度の報告や短報が若干見られる。筆者は *Pidonia* 類を記録するとともに、*Pidonia* 属を用いて武尊山の地域性についても触れてみたい。

調査地域とその概要

調査地域は武尊山の東側を流れる東俣沢の上流部の林道(特に終点付近)とその尾根部である。

当地は従来典型的なチシマザサ・ブナ群の原生林で、ブナ・ダケカンバ・チシマザサが圧倒的に優占しており他にミズナラ・シラカバ・イタヤカエデ・センノキ・ノリウツギなどが自生しているという植生であるが、今日では伐採が進みそのほとんどがカラマツの植林となっている。したがって従来の植生が残っている地域は東俣沢の上流部と西俣沢にはさまれた尾根部(武尊牧場からの武尊山登山ルート上)のみである。また尾根部のブナ群の原生林も囲りの開けた植生(チシマザサとカラマツの



1. セスジヒメハナカミキリ, ♀ 2. セスジヒメハナ, ♀ 3. ミワヒメハナ, ♂ 4. ミワヒメハナ, ♀

幼木)の影響を受け年々衰弱していく傾向にある。

武尊山の *Pidonia* リスト

1. *Pidonia (Mumon) debilis* (Kraatz)

チャイロヒメハナカミキリ

22. VII. 1974, 25-27. VII. 1975.

本種は武尊においてごく普通に見られ、8月に入ってからノリウツギなどの花上で多く見られる。

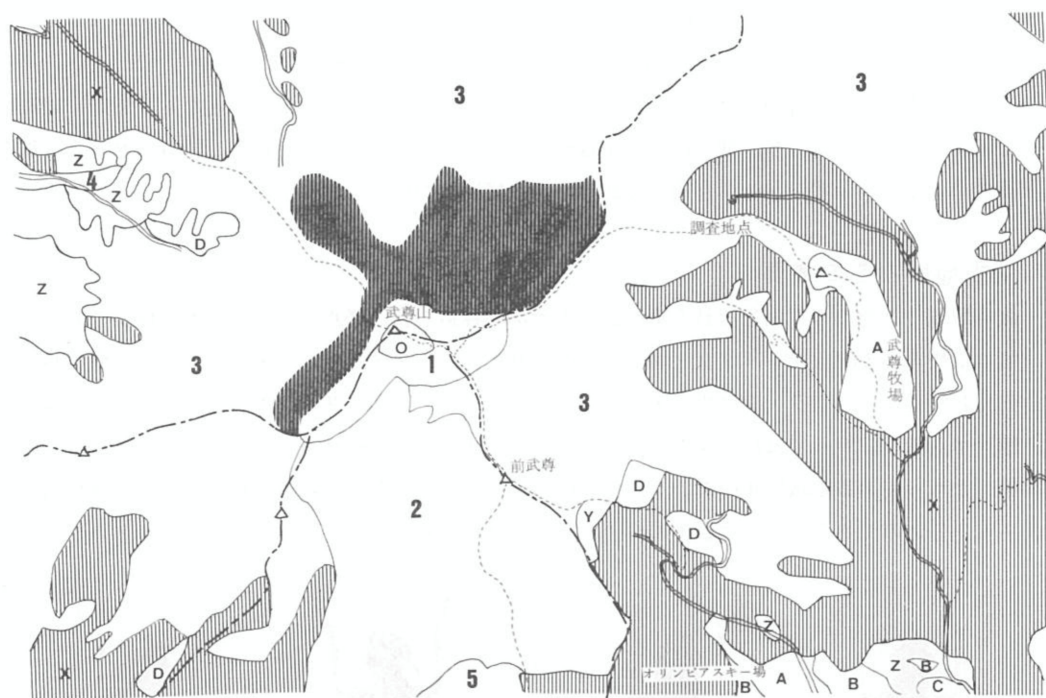
2. *Pidonia (Omphalodera) puziloi* (Solsky)

フタオビチビハナカミキリ

7月末以後では調査地域内では得られないが、十二社では春から残っている個体が見られる。

3. *Pidonia (O.) testacea* (Matsushita)

ニセフタオビチビハナカミキリ



武尊山周辺の植生

植生図の凡例

針葉樹

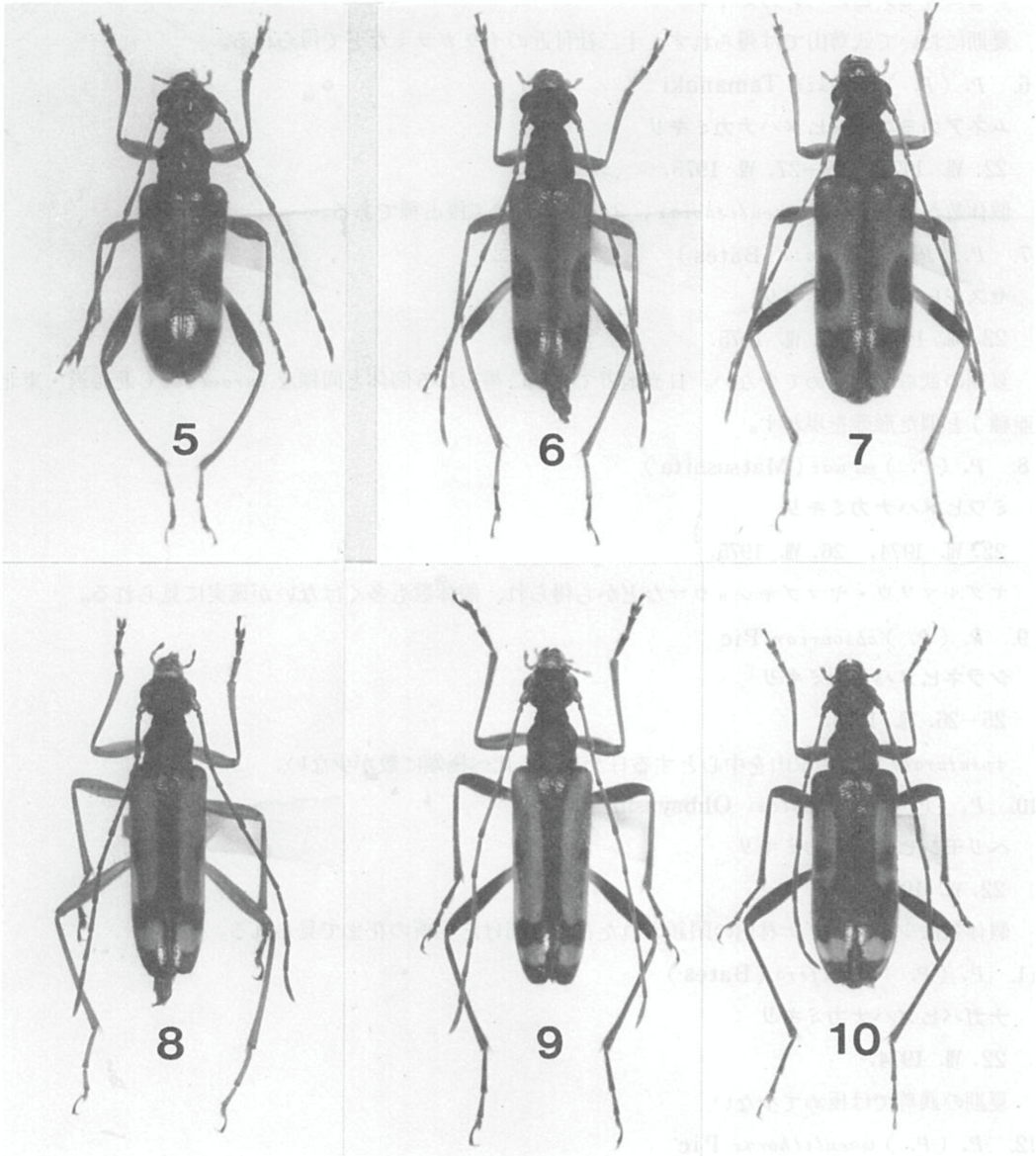
- P シラビソ・オオシラビソ群集
- X カラマツの植林
- Y ウラジロモミ群集
- Z スギ・ヒノキ・サワラ群集

ブナ・ミズナラ・ダケカンバなど

- 1. ササ・ダケカンバ群集
- 2. ミヤマハンノキ・ダケカンバ群集
- 3. チシマザサ・ブナ群集
- 4. ブナ・ミズナラ群集
- 5. ミズナラ・リョウブ群集

その他

- A 牧草地
- B クスギ・コナラ群集
- C 畑地
- D 伐採跡地
- O 高山低木林



5. ニセフタオビノミハナ, ♂ 6. ニセヨコモンヒメハナ, ♂ 7. ニセヨコモンヒメハナ, ♀
 8. シラネヒメハナ, ♂ (白根山産) 9. シラネヒメハナ, ♂ (武尊山産) 10. シラネヒメハナ,
 ♀ (武尊山産)

22. VII. 1974, 25-26. VII. 1975.

ヤグルマソウ・ヤマブキシヨウウマなどでごく少数得られるのみである。

4. *Pidonia (Pidonia) insuturata* Pic

ヨコモンヒメハナカミキリ

22. VII. 1974.

7月末にヤマブキシヨウウマなどで得られるが日光地方に比べ極めて少ない。

5. *P. (P.) similima* Ohbayashi et Hayashi

ニセヨコモンヒメハナカミキリ

夏期において武尊山では得られず、十二社付近のイワガラミなどで得られる。

6. *P. (P.) masakii* Tamanuki

ムネアカヨコモンヒメハナカミキリ

22. VII. 1974, 25-27. VII. 1975.

個体数が極めて多く *maculithorax*, *debilis* と並ぶ優占種である。

7. *P. (P.) amentata* (Bates)

セスジヒメハナカミキリ

22. VII. 1974, 25. VII. 1975.

夏期の武尊では極めて少ない。日光地方で夏期に得られる個体と同様な *kurosawai* (北海道・東北亜種) と似た形態を現わす。

8. *P. (P.) miwai* (Matsushita)

ミワヒメハナカミキリ

22. VII. 1974, 26. VII. 1975.

ヤグルマソウ・ヤマブキシヨウマなどから得られ、個体数も多くはないが確実に見られる。

9. *P. (P.) obscurior* Pic

シラネヒメハナカミキリ

25-26. VII. 1975.

insuturata 同様白根山を中心とする日光地域に比べ極端に数が少ない。

10. *P. (P.) matsushitai* Ohbayashi

ヘリモンヒメハナカミキリ

22. VII. 1974.

個体数は少ないがブナ林内の閉鎖された花から開けた場所の花まで見られる。

11. *P. (P.) signifera* (Bates)

ナガバヒメハナカミキリ

22. VII. 1974.

夏期の武尊では極めて少ない。

12. *P. (P.) maculithorax* Pic

カクムネヒメハナカミキリ

22. VII. 1974, 25-27. VII. 1975.

武尊において優占種の1つである。チシマザサとカラマツの幼木間に散在するノリウツギからも多数得られる。

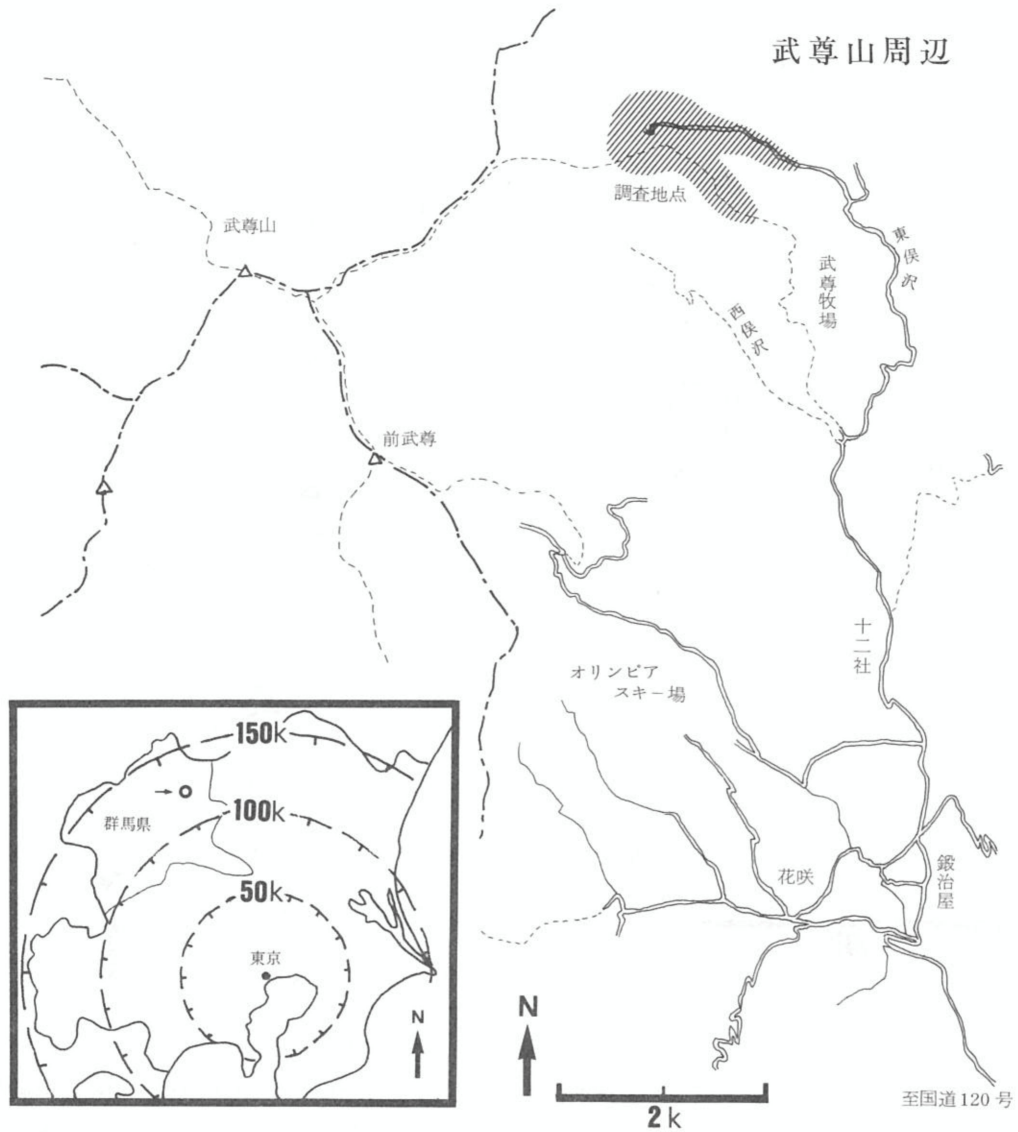
13. *P. (P.) grallatrix* (Bates)

オオヒメハナカミキリ

22. VII. 1974, 25-27. VII. 1975.

7月中は多くはないが8月に入ると *debilis*, *masakii*, *maculithorax* と並んでノリウツギなどで多数見られる。

14. *P. (P.) discoidalis* Pic



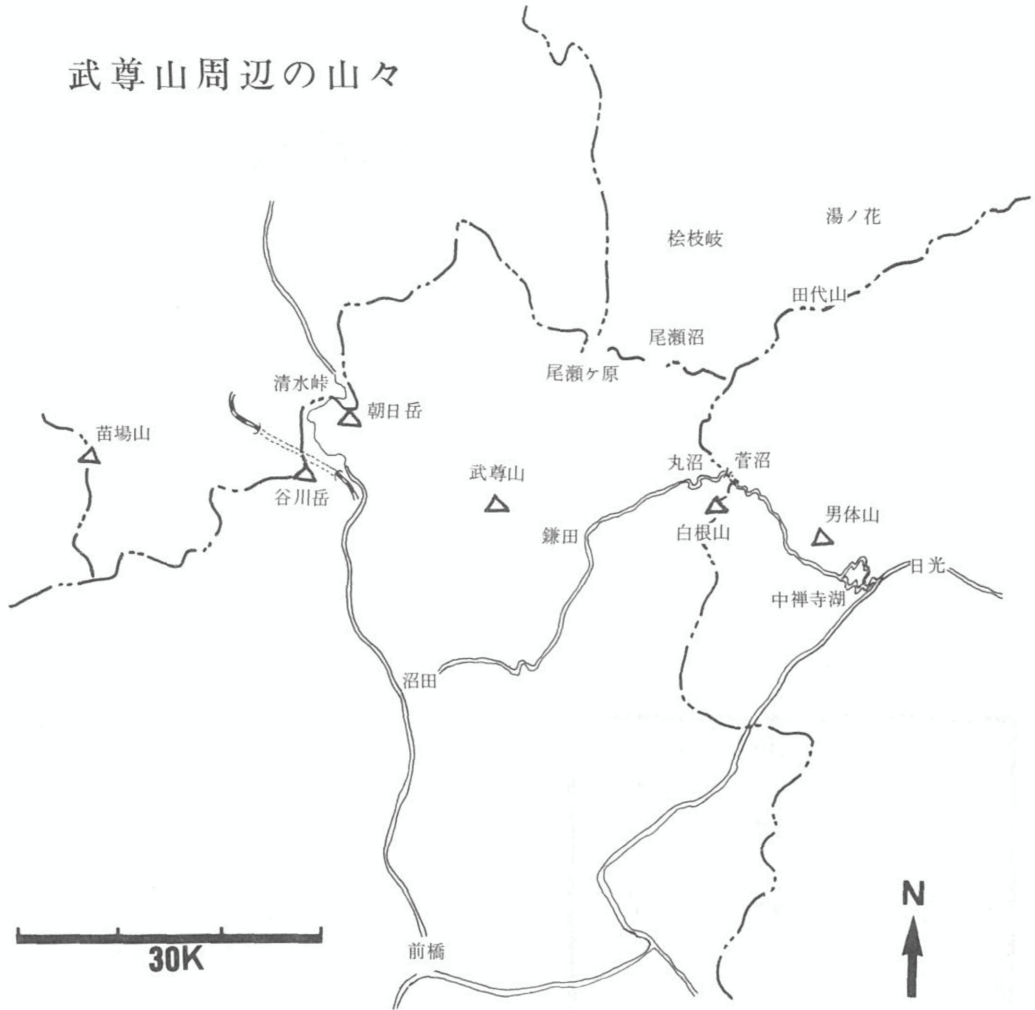
キベリクロヒメハナカミキリ

22. VII. 1974.

matsushitai と同様に閉鎖された花から開けた花まで見られ、日光地域のものと形態的にもかわらない。

7月末から8月にかけて調査地域内で得た個体から、一般に武尊にはブナ林性の *Pidonia* が多いということになる。それは *masakii*、*maculithorax*、*grallatrix* が極めて多いこと、および *testacea*、*insuturata*、*obscurior* などの針葉樹林性の *Pidonia* が極端に少ないことなどから明らかである。またその反面、日光白根山においてブナ林に多い *semiobscura* ホソガタヒメハナカミキリおよび *ohbayashii* オオバヤシヒメハナカミキリが全く得られなかった。この原因は伐採による植生の変動に

武尊山周辺の山々



よるもの、調査の片よりによるものなどが考えられるが、武尊山の持つ特殊性によるものとも考えられる。本調査によれば7月のヤグルマソウ・オニシモツケでは *puziloi*、*simillima* を除く上記の12種がすべて見られ、*debilis*、*masakii* などが優占するが、8月のノリウツギではこの2種と *maculithorax* および *grallatrix* のみが多数訪花していた。

いくつかの興味ある種について

○ヨコモヒメハナカミキリ

武尊における本種は個体数が少ないということ以外に特徴的なことはない。しかし武尊と他の近接する山々との位置的な関係からは興味ある事がらが考えられる。

insuturata はその生活圏をシラビソ・オオシラビソの針葉樹林帯に持ち、日光が原産地で白根山系に極めて多い。また本種に近縁の *hayashii* クロヨコモヒメハナカミキリは苗場山などを原産地とし、群馬・新潟県境の清水峠にも多産する(齊藤・鈴木1975)。さらに *hayashii* も *insuturata* 同様にシラビソ・オオシラビソの針葉樹林帯に生活圏を持っているが、現在のところこの両者の混生地

域は知られていない。武尊は *insuturata* の多産する日光白根山からも *hayashii* の多産する清水峠を有する谷川連峰とも独立しており、なおかつ両地域の中間的な場所に位置している。今回の調査地域（チシマザサ・ブナ群）のブナ帯では *insuturata* がごくわずか得られたが、両種の本来の生活圏ではどのような割合になるのが大きな興味の対称となる。すなわちそれは武尊山頂の北部から西部に存在するシラビソ・オオシラビソ群の原生林には *insuturata* が生息するのか、あるいは *hayashii* が分布するのかという問題である。機会があれば調査したいと考えているが、読者の方々にも積極的な調査をお勧めしたい。

◦ミワヒメハナカミキリ

武尊の本種の最も特徴的なことは、雄の上翅の斑紋が中央側部のものを残して消える（二紋型）地域型を現わし、通常の斑紋を持った個体は全く現われないことである。このような雄の二紋型は清水峠付近の個体群や尾瀬あるいは福島県の南西部の桧枝岐付近の個体群と同様である。なお、このような地域変異は雄のみに見られ、雌の個体は見かけ上通常の型と全く同様である。ところが比較的近接している白根山系の日光地域では本種は全く見られず、白根山西部を流れる仁加又沢で得られたという話を聞いたのみであるが、筆者はその個体を検することができなかった。したがって一応本種の分布は日本海側から谷川連峰まで延び、さらには武尊山を含み日光以南を避け、福島（桧枝岐など）を通り東北地方全域に広がっているということになる。本種はその分布の壁が武尊——白根間あるいは福島南西部（桧枝岐付近）——日光地域に存在すると思われる。本種がこの壁を越えられないという問題とともに、このような分布の縁で特異な地域型が現われることは極めて興味深い。

◦シラネヒメハナカミキリ

本種はその和名の示すように日光白根山から名をとっており、加賀の白山に *hakusana* という亜種を有するが両者の関係がいろいろな話題となっている。それは本種に極めて近縁な *nagayamai* ナガヤマヒメハナカミキリが福島から、また *yokoyamai* ヨコヤマヒメハナカミキリが八ヶ岳から、いずれも独立種として扱われており、さらにはそれぞれの中間地域でどの種にあてはまるものか非常に判断しにくい個体群が分布していることが原因している。

武尊の個体群は雄交尾器の形態、およびその他の一般形態に全く差が見られないことから、先にリストで上げたように *obscurior* である。しかし種以下の地域的な変異においては雄の腿節の色彩に顕著に現われる。すなわち白根山系の日光地域の個体では肢のすべてが黄褐色（原型）であるのに対し、武尊では中後腿節が顕著に黒化する（アソ黒型）。武尊において筆者が検した数10個体中例外は1例であり、白根山系では700~1500個体中に1個体の例外が現われる程度である。筆者の検したところによれば、この地域型も *miwai* の変異の現われ方とよく似ており、雄のみに現われ雌では白根山系の個体と区別ができない。また、谷川山系および尾瀬においてもこの（アソ黒型）地域型が現われる点もよく似ている。したがって *obscurior* の原型（雄の肢が決して黒くならないオリジナルなタイプ）の個体群は白根山を中心とした白根山系の日光地域にのみ分布し、周辺地域の尾瀬、武尊から谷川連峰にかけては地域型（雄の肢が黒くなるタイプ）を現わす別の個体群（デーム）が生息している。

以上のように武尊山は白根山を中心とする日光地域と他の近接した地域を考えるうえで非常に重要な地域であるといえるだろう。

要約

1. 武尊山は日光の中心である白根山からも新潟県境に連なる谷川連峰からも独立しており、なおかつ両者のほぼ中間に位置する。
2. 武尊（本調査地点周辺）の *Pidonia* 相は *masakii*、*maculithorax*、*grallatrix* に代表されるようなブナ帯の *Pidonia* 相であり、*testacea*、*insuturata*、*obscurior* のような針葉樹林性の *Pidonia* は極端に少ない。
3. 武尊山は *miwai* および *obscurior* が特異な地域型を現わすという特殊性から、日光白根山よりはむしろ谷川連峰、尾瀬あるいは福島南西部（桧枝岐など）と関係が深いと考えられる。
4. 以上のことから、武尊山は *miwai* および *obscurior* の種の持つ分布域や種内変異の問題、あるいは山頂付近のシラビソ・オオシラビソ群の原生林に *insuturata* と *hayashii* のどちらが生息しているのかなど興味深い事がらを多く秘めている。

末筆ながら本調査にあたり積極的な御協力をいただいた柴田考尚、林良一、楠嘉博、鈴木互、小野寛昭諸氏に深く感謝する。

参 考 文 献

- 京浜昆虫同好会カミキリグループ（1967） 日光とその周辺のカミキリ，*Ins. Mag.*（70）：34-74.
藤田 宏（1971） 1971年奥日光のカミキリムシ，*Damaster*，2（3）：2-13.
斉藤秀生・鈴木 互（1975） クロヨコモシメハナカミキリの群馬の記録，*甲虫ニュース*，（25/26）
：11
観光資源保護財団（1976） 武尊山・自然環境の保全と適正利用の方向，東京

（〒228 座間市ひばりヶ丘3-690-5）

北海道の *Pidonia* (ヒメハナカミキリ属) について

神田 英治

「On the Genus *Pidonia* (Coleoptera, Cerambycidae) from Hokkaidō」

By Eizi KANDA

北海道の *Pidonia* 属は次の2種しか分布していないとされている。すなわち、*Pidonia puziloi* フタオビノミハナカミキリ(図1A)および *Pidonia amentata* セスジヒメハナカミキリ(図2A, B)である。そのうち *P. amentata* は全道各地に広く分布しており(図3)、いたって普通種である。しかし、*P. puziloi* については、Matsushita (1933)に“Hokkaido (Moiwa, Jōzankei)”とあり、また玉貫(1943)では“少なくともあるが、道南各地に発見せられるし……”という報告がある以外、その後の長瀬・石田(1970)、石田・青木(1973)、斉藤ら(1975)、佐々木(1978)などの道央を中心とした記録を見ても採集されたという報告はない。また、北海道大学農学部昆虫学教室所蔵標本の Matsushita Collection の中にも *P. puziloi* の標本はなく、もっかのところ疑問種と思われるものである。

P. puziloi は *P. testacea* ニセフタオビノミハナカミキリ(図1B)に近似種で、一般にほとんど区別しにくいものであったが、最近窪木(1978)は、両種の区別点として鞘翅の長さ、鞘翅の毛の形態と密度及び触角第3節と第4節の比で容易に分けられるとしている。また *P. testacea* が主に中山～亜高山帯に、*P. puziloi* はそれよりも下部に生息しているという。そして *P. testacea* は、本州中部山岳地帯を中心にその周辺地域に狭域的分布をしており、*P. puziloi* は本州、四国、九州などかなり広域的分布をしている。その訪花植物は本州では主にガマズミ (*Viburnum dilatatum*) やガクウツギ (*Hydrangea scandens*)、またヤマアジサイ、サワフタギ、カエデ類等の花からも採集されている。

宮部(1935)は、北海道のフロラについて“地質学上の石狩低地帯は、北海道植物区を二分する重要な境界であり、これより西南部は温帯性フロラ、東北部は亜寒帯性フロラが主となっている。西南部地方は、さらに黒松内低地帯(長万部-黒松内-潮路)により「黒松内以南-北海道西南部」と「黒松内以北に在る北海道西南部地方」に二分される。前者にはブナやヒノキアスナロなどの純林がみ

〔表1 松下コレクションの北海道産 *Pidonia*〕

〔Table 1. The *Pidonia* species from Hokkaidō of Matsushita Collections.〕

Species	Locality	Date	Coll.
<i>P. puziloi</i>	Sapporo (Moiwa, Jōzankei)	?	Matsushita
<i>P. amentata</i>	Hokkaidō		
<i>P. debilis</i>	Hokkaidō, Yubari	?/Ⅶ, 1935	Matsushita
<i>P. obscurior</i> (?)	Hokkaidō, Yubari	8/Ⅶ, 1934	S. Hirayama
<i>P. gibbicollis</i> ?	Hokkaidō, Yubari	?	?

1

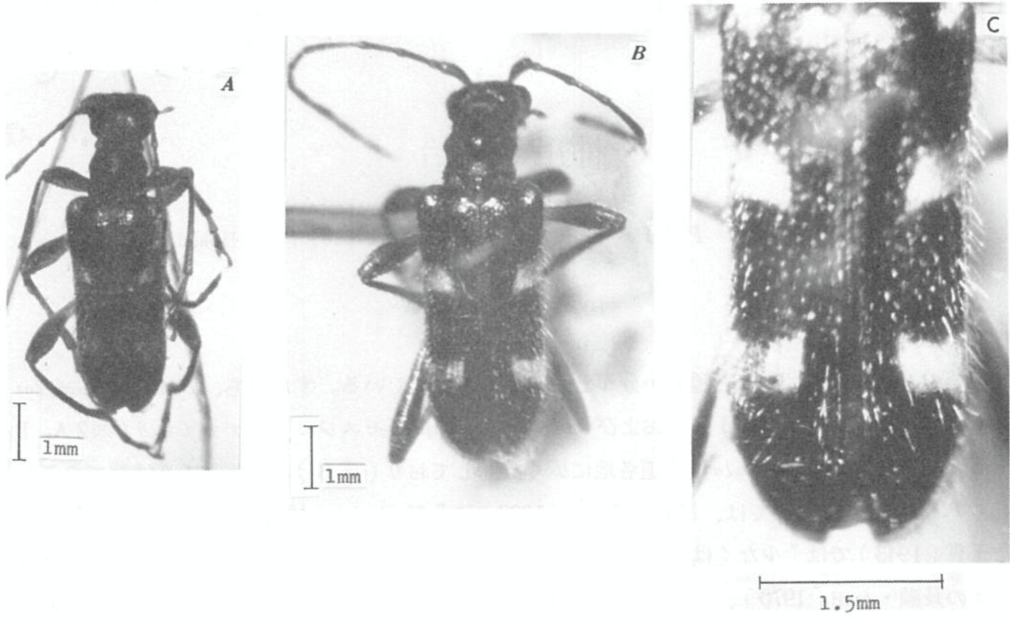


図1 A:フタオビノミハナカミキリ(栃木県湯西川産) B:ニセフタオビノミハナカミキリ(群馬県金精峠産) C:ニセフタオビノミハナカミキリの鞘翅の毛 [Fig. 1. A: *Pidonia puziloi* from Yunishigawa, Tochigi Pref.; B: *Pidonia testacea* from Pass Konsei, Gunma Pref.; C: Elytron hairs of *P. testacea*.]

2

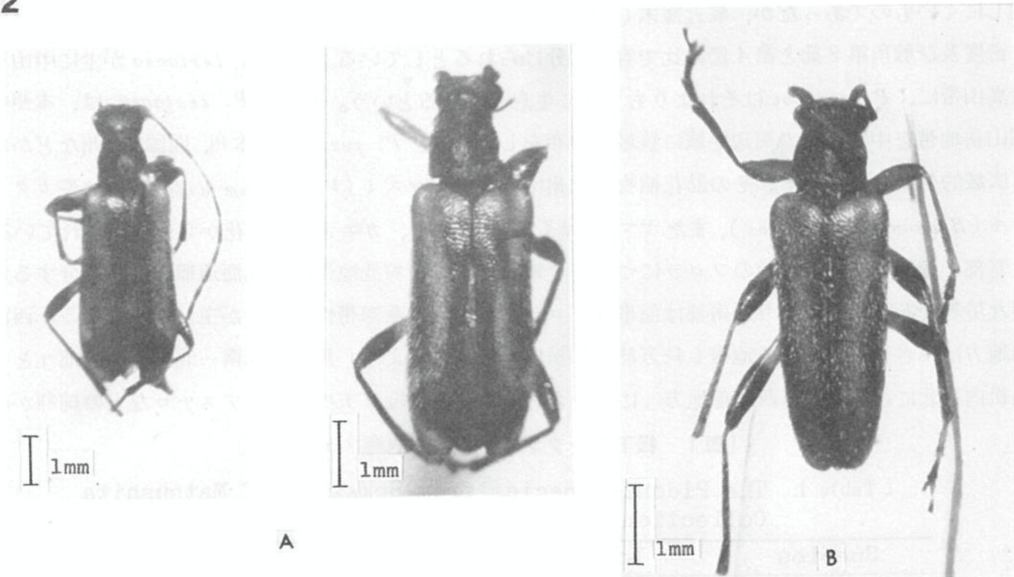


図2 A:セスジヒメハナカミキリ(北海道富良野市麓郷産) B:同上(北海道日高戸蔭別産) [Fig. 2. A: *Pidonia amentata* from Rokugō, Furano City, Hokkaidō; ♂ (left), ♀ (right). B: *Pidonia amentata* from Tottabetu, Hidaka, Hokkaidō.]



- Sapporo
- △ Kuromatunai
- Localities of *Pidonia amentata*

図3 セスジヒメハナカミキリの分布図 [Fig. 3. Distribution map of *P. amentata* (The region of distribution hatched with oblique lines).]

られ、本州フロラの延長とみられるのに対し、後者のフロラには、なお多くの南方要素がみられ、……”と述べており、また河野(1955)は、チョウ類、アブ類の分布を例にとり、北海道の昆虫分布境界線として札幌低地帯(内陸で夏期積算温度の高い上川平原も含まれる)を挙げ、植物分布境界線の石狩低地帯と同様に、北部温帯性の昆虫と亜寒帯性昆虫との間衝帯になっているという。したがって、植物相や昆虫相共にこの地域には本州との共通種を数多く産し、

*P. puziloi*の代表的訪花植物であるガマズミは道南から日高地方にかけて分布している。またトチノキも札幌付近まで分布しており、黒松内(図3)には本邦北限のブナ林が在る。したがって*P. puziloi*の生息環境は十分あると思われる、道南や道央に分布する可能性は大きい。

下山(1963, 1964b)は、青森県の*Pidonia*について上記2種を含め*P. debilis*、*P. discoidalis*、*P. japonica*、*P. miwai*、*P. signifera*、*P. maculithorax*の8種を報告し、また青森県立郷土館(1973)によれば同県津軽半島西北部山塊から*P. debilis*、*P. miwai*、*P. insuturata*、*P. signifera*、*P. japonica*、*P. amentata*、*P. puziloi*の7種が報告されている。したがって津軽海峡で隔ってはいるもののこれらの種も分布する可能性も十分考えられる。

以上北海道には前述の2種しか記録はないが、Matsushita Collectionの標本の中に北海道産と思われる標本が若干あったので、ここに参考までにその種類(表1)を紹介しておく。なお、Matsushita Collectionはラベルが一様に印刷されており確実性の点で欠けるため、その中でもやや信憑性があると思われる手書きラベルのみ選んだ。表1の*P. obscurior*と*P. gibbicollis*と思われるものはまず北海道に分布する可能性はないと思われる。

最後に、貴重な文献・資料並びに御助言を賜った北海道大学農学部昆虫学教室の青木重幸氏に感謝の意を表す。

引用文献

- 青森県立郷土館(1973) 津軽半島西北部山塊の自然調査、第1次調査概要; 青森県立郷土館報, №1: 1-15.
- 石田浩司・青木重幸(1973) 札幌産カミキリムシ科目録; HORNET(11): 19-30.
- 河野広道(1955) 北方昆虫記; 楡書房, 札幌: 6+157.
- 窪木幹夫(1978) 日本産*Omphalodera*亜属の再検討; 日本昆虫学会第38回大会講演要旨: 16.
- Matsushita, M. (1933) Beitrag zur Kenntnis Cerambyciden des Japanischen Reichs. J 1. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 34: 157-445.
- 宮部金吾(1935) 北海道のフロラに就て; 日本学術協会報告, 10(4): 807-906.

長瀬良一・石田浩司(1970) 札幌産 Beetles (甲虫類)について(Ⅱ), カミキリムシ科; HO-RNET (8): 1-38.

齊藤龍司・鈴木茂・鈴木敏春・北嶋直之(1975) 1973-1975(北海道産カミキリ採集記録); エゾカミキリ: 1-51.

下山健作(1963) 青森県、特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(1); 昆虫学評論, 16(2): 67-76.

——(1964b) 青森県、特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(3); 昆虫学評論, 17(2): 77-84.

佐々木恵一(1978) 札幌市近郊の花に集まる天牛について; 蝦夷白蝶, 8(1): 41-48.

玉貫光一(1942) 日本動物分類, 天牛科2 花天牛亜科(昆虫綱-鞘翅群), 三省堂, 東京: 1-251.

(〒184 東京都小金井市貫井北町3-2 小金井公務員住宅26-48)

日本鞘翅目学会第3回総会レポート

新里 達也

日時：1978年11月20日(日) 午後0:30~7:00

場所：東京駒場・筑波大学附属中学校

○ 講演

高桑正敏氏「日本と台湾の *Polyne*」

斉藤秀生氏「カミキリムシの *Genitalia* について」

○ 同定会(順不同・敬称略)

ゴミムシ科(森田誠司)、オサムシ科(小宮次郎・奥村尚)、コガネムシ科(石田正明)、クワガタムシ科(境野広行)、ジョウカイボン科(小野寛昭)、コメツキムシ科(鈴木互)、ゴミムシダマシ科(近藤茂昭)、ハナノミ科(高桑正敏)、カミキリムシ科(草間慶一・露木繁雄・小宮次郎・高桑正敏・藤田宏)、ヒメハナカミキリ類(斉藤秀生)、ハムシ科(小宮義璋)、ゾウムシ科(江本健一)

本学会3回目の総会は1977年と会場を同じくした筑波大学附属中学校(当時の東京教育大駒場中学校)の一室を借りて1978年11月12日(日)午後12時から7時にわたって、開催された。当日は穏やかな秋日和に恵まれ、遠来からも出向かれた方々も多く前回にも増した大変な盛況振りであった。150名近くは収容できるという大講義室が狭く感じられたほどであるから驚かずにはいられない。唯一の甲虫専門学会の年1回のお祭り行事という慣習もようやく全国の甲虫愛好家の間に定着してきたかのようである。

草間慶一会長の開会の言葉により始められた会は、事務局からの会計報告に続いて本会より日本産及び台湾産のカミキリムシ科の2冊の図鑑を発刊するという具体的な説明がなされた。このような会の発展を約束する当局の前向きな計画に対して満場から拍手をもって御同意を頂いたのは言うまでもない。

その後の2つの講演はその詳細については例によって本誌上に講演者よりその概要が紹介されているので省くが、これまでになく聴衆の反応も敏感で質問も盛んに行なわれていた。とりわけ1部の宴会仕掛人が本総会の席を忘年会にしてしまおうと交尾器に関する卑下た質問を投げ掛けるといった光景も見られたが、これは巧みに講演者に躲されてしまい場内は爆笑の渦に包まれた。このような場面に対する識者の多少の誹りはともかくとして、私個人としては会を和やかに進めるうえで無意味なことではないと思う。

もう恒例となった休憩後の同定会はこれを目的に来るという方もあるくらいで本会の呼び物のひとつとなってしまった。今回も熱心なアマチュア研究家の箱の中から新種新亜種や思いがけない新分布の記録が出たに違いない。同定に労を致した専門家の方々にとっても何らかの意義があったと期待している。

こうして第3回総会は盛会のうちに幕を閉じたわけであるが、3年前の第1回目の際狭苦しい場所であわただしく行なわれたことを思うと、いかに現在余裕を持って開かれているか、その成長ぶりには感心してしまう。運営者側が慣れてきたということもあろうが、これもひとえに会員諸氏の御指導・御協力の賜物と信じている。今後ともかわらぬ御援助をお願いしたい。

なお、当日の出席者は次のとおり。(五十音順、敬称略)

青木小四郎	石川啓吾	石川 豊	石田正明	伊藤 淳	伊藤 武	伊藤達美
伊藤正雄	伊藤弥寿彦	井野川重則	今村佳英	今村隆一	上野俊一	上野紀武
江本健一	大木 裕	大桃定洋	小笠原隆	岡田守男	奥村 尚	奥田好秀
小倉直樹	小野寛昭	笠原須磨生	加藤忠男	神垣匡伸	上坂幹夫	川田一之
衣笠恵士	絹川 通	木下富夫	木村義夫	日下部良康	草間慶一	楠 嘉博
久保田篤男	久保田雅久	久保田正秀	熊谷 雄	桑久仁雄	黒川誠治	黒沢良彦
郷 遠	郡山信夫	小林一之	小林 昇	小林裕和	小宮次郎	小宮義璋
近藤教一	近藤茂昭	齊藤秀生	酒井 香	酒井和広	柴田泰利	清水喜一
鈴木克彦	鈴木 互	妹尾俊男	田尾美野留	高桑正敏	高須明子	武智昭一
多比良嘉晃	田村隆宏	塚原一秀	津崎 満	坪井俊久	遠山雅夫	長尾 康
中込正男	中村誠治	中村 光	中村博之	中山不羈	新里達也	西山保典
根岸秀夫	浜口正博	林 良一	平井克男	平野幸彦	平山洋人	藤田 宏
二川宣也	穂積俊文	細野典明	堀江英年	堀口 徹	松本俊信	峰 薫
森 康真	森田誠司	安永一正	矢田秀雄	矢野立志	山本泰子	和田 薫

日本と台湾の *Pothyne* 属について

高桑 正敏

日本の *Pothyne* 属の種については、種名が混乱されたままなうえに種関係についても疑問があったので、台湾産も含めたそれらを私なりに検討してみたところ、次の結果が得られた。

1) 日本にはカスリドウボソ系、タテスジドウボソ系、シロスジドウボソ系、イマサカドウボソ系の4系統が分布する。

2) 台湾にはカスリドウボソ系、タテスジドウボソ系、シロスジドウボソ系に近い1種の3系統が分布する。

3) カスリドウボソ系は、日本では八重山諸島の *variegata yayeyamana*、沖縄本島の *albolateralis*、奄美諸島の *hayashii* の計3種が知られていたが、台湾産も含めこれらはすべて同一種とした方が妥当である。また *albolateralis* は白化の著しい個体に対して命名されたものだが、これは他の沖縄本島産のものと同種である。なお沖縄永良部島産は別亜種として認識されることが望ましい。

4) タテスジドウボソ系は明らかとはならなかったが、おそらく台湾中北部より琉球にかけての1種、台湾南部の1種 *formosana* の計2種。

5) シロスジドウボソ系は沖縄本島・奄美諸島以北の *silacea*、沖縄永良部島の *nobuoi*、宮古島の *mi-*

yakoensis、与那国島の *yonaguniensis* が知られていたが、これらにアンテナの長短かつ細太などの差はあるものの、それらの個体差の大なること、および互いの関連を考えれば、すべて同一種とした方が妥当である。なお、石垣・西表両島に分布するものはアンテナの長いタイプ。

6) イマサカドウボソ系は与那国島、石垣島北部、宮古群島伊良部島に分布する *imasakai* 1種のみ。

7) 日本ではタテスジドウボソの種名に *albolineata* を使用してきたが、*albolineata* は台湾に分布するシロスジドウボソ系に近い1種のことであり、八重山産に対しては *chocolatoides* を使用すべきである。ただし、宮古島産は八重山産といくぶん異なる。

8) オキナワドウボソ *liturata* はタテスジドウボソ系、*Chocolatoides* との関係は不明だが、おそらくは同一種であろう。

9) 日本ではシロスジドウボソの種名に *silacea* を当ててきたがこれは誤りで、*annulata* を用いるのが正しい。

10) *Silacea* の特徴は *imasakai* のそれとほぼ一致し、混乱を防ぐために両者を同一種として扱わざるをえない。

11) 1978年10月の日本昆虫学会大会席上で九州大学の榎原寛氏が琉球の *Pothyne* について講演され、上記のうちでは特に5)と9)、10)の点について私とは逆の意見を述べられた。

以上の詳細は月刊むし(94): 3-8; (96): 15-20に紹介されているので参照願いたい。

カミキリの交尾器 (Genitalia) について

斉藤 秀生

演者は「カミキリの交尾器について」と題し、下記のような3点について講演した。

- 1) カミキリムシ科の Genitalia に関する研究の現状と今後の問題点。
- 2) Genitalia という部分の形質 (Character) の重要性について。
- 3) 今後の交尾器の研究と形質の評価

カミキリムシ類の雄交尾器は日本で近年になってやっと原記載などに図示されるようになったが、まだまだ少なくその形態学的研究は、江原 (1954)、中根 (1954, 1955)、中根・大林 (1957, 1959) などで知られるのみであり、外国の論文を見ても Bordas (1899) などがあるが決して多くはない。また雌交尾器にいたっては、西尾 (1957) などごくわずかに図示されているが、ほとんど扱われていない。鞘翅目全体として見ると交尾器を扱った論文は、雄交尾器の形態—Sharp & Muir (1912)、雌交尾器の形態—Tanner (1925)、雌雄交尾器の用語—Lindroth (1957)、昆虫類各目の交尾器の形態と用語 (鞘翅目の部分)—Lindroth & Palmén (1956)、腹部一般の形態—Matsuda 昆虫の形態—Snodgrass (1935) など教科書的なものがいくつかある。

カミキリムシ科の Genitalia は鞘翅目の中ではコメツキムシ・タマムシ科などの三片型 (trilobete type)、オサムシ・ハネカクシ科などの (articulate type)、ゴミムシダマシ、ハナノミ科などの (vaginate type) に対し、馬乗型 (annulate type) に属し、ハムシ・マメゾウムシ科などのハムシ主科およびオトシブミ・ゾウムシ科などのゾウムシ主科と同様である。また、コメツキモドキ・オオキノコムシ科などもよく似た形態をしている。

Genitalia の各部分の名称については、鞘翅目の中においても、各科によって相同の部分であるに

もかかわらず異なることが多い。例えば、カミキリムシ科において通常“Median lobe”と呼ばれている部分（penis）はマメゾウムシ科では“Median lobe”（Johnson, 1970）、ハムシ科では“Aedeagus”（Samuelson, 1973; Schever, 1969 ほか）、ゾウムシ科では“Phallus”（O'Brien, 1970）、オオキノコムシ科では“Median lobe”（Chūjō, 1969）、テントウムシ科では“siphon”（Sasaji, 1971）となっている。また、より詳細な部分については特にこれといった名称がない。

以上のようにカミキリ類のGenitaliaの研究を行なうには、実際にはまだまだ不十分な部分が多く、Genitaliaの各部名称や個体変異および地域変異などいくつかの問題点があるので、前段階としてこのような諸問題を解決するための予備研究を多く重ねなければならないと考える。

なお、当日出席された方には、ヨツスジハナカミキリの雄交尾器の詳細図、ミヤマカミキリの雌雄交尾器の図および一般的なカミキリのGenitaliaとその名称を記したプリント（A4版、3枚）を配布した。

末筆ながら、本題を講演するに当って積極的な御協力をいただいた東京農業大学昆虫学研究室の楠嘉博・高須明子両氏に心から御礼申しあげるとともに、講演後たいへん参考になる御意見、御指摘をいただいた小宮次郎、郷遠両氏にも深く感謝する。

日本鞘翅目学会第4回総会レポート

平山 洋人

日時：1979年11月18日（日） 午後0：30～6：30

場所：東京駒場・筑波大学付属中学校

○講演

安田幸夫氏「渡島半島低地のオシマルリオサムシ」

鈴木 互氏「*Csikia* 属およびその近縁のグループについて」

斉藤秀生氏「台湾の *Pidonia* 属の類縁関係について」

第4回を迎えた今年度総会は甲虫談話会との初の合同総会として行なわれたため、例年にも増して賑やかな会となった。両会双方の会員である方もかなりの人数にのぼることであり、関東の2つの会の親睦をはかる意味からもこういった企画は今後とも折に触れ続けていきたいものである。

談話会側の代表として渡辺泰明氏、続いて本会から草間会長、衣笠副会長、穂積名古屋支部長の恒例の挨拶の他、今回は黒佐和義博士と江田茂、長尾康、深町宗通の各氏からもそれぞれ御挨拶をいただいた。

穂積名古屋支部長の挨拶中、カミキリの県別分布記録についてのお話は近年急増しているカミキリ屋の盲点を突く内容で、大阪府・山梨県のウスバカミキリや、群馬県のゴマダラ、キクスイカミキリ

が（今年4月の時点で）文献上未記録というのは普通種は記録されないという好例？であり、驚くと共に反省させられる点である。黒佐和義博士のタニグチコブヤハズやアカイロニセハムシハナ発見の際のいきさつや、近年御研究中という甲虫につくダニに関するユーモラスなお話も興味深く聞かせていただいた。江田茂氏の、中南米の大型カプトムシ類の地理変異や北米のカミキリ類が西海岸、東海岸でそれぞれ特化しているというお話には、我が国の狭い国土内でのそれとはまた異なった規模での昆虫類の分化を感じさせられた。

会務報告では鞘翅目学会側からは台湾および日本産のカミキリ大図鑑の発行に関する報告があったが、当初の計画とは逆に日本産の方が先に作製されることとなった。発刊は今秋が予定されている。なお、甲虫談話会側からは日本産甲虫目録の本年度発行分（ハムシ科、カミキリムシ科、コガネムシ科）に関する報告がなされた。

例年行なわれている講演は、今回は北海道の安田幸夫氏による「渡島半島低地のオシマルリオサムシ」、東京農大の鈴木互氏の「*Csikia*属およびその近縁のグループについて」、それに齊藤秀生氏の「台湾の*Pidonia*属の類縁関係について」、の3題が演じられた。安田氏の御研究は渡島半島に於けるオシマルリオサの詳細な分布と変異状況およびオオルリオサムシとの関係について多彩な標本を示しながら解説されたものだが、この内容とほぼ同様の論文が先頃月刊し5月号（111号）誌上に掲載されたので、美しいカラーグラビアと共に御覧になった方も多いかと思う。鈴木氏のコメント、齊藤氏の*Pidonia*の研究はそれぞれ長年に渡り続けてこられた一貫した研究姿勢の一端を示すものであり、特に齊藤氏が近年、雌のそれを含むハナカミキリ類の生殖器の機能やその部分ごとの形質評価を研究上大きなテーマとされていることなど、深く興味をそそられるものであった。

近年の総会の特色として、学生を中心とした若手の参加が年ごとに多くなってきているが、講演にせよ、同定会にせよ、このような会は若手甲虫屋にとって諸先輩方から様々なことを学びとる絶好の機会であり、臆することなく、質問等積極的に行なって欲しいと思う。幸いにして本会にはベテランも若手も分け隔てなく交流できるという気風があるのだから。また、専門家やベテランの方々には、私を含め若手の日頃からのぶしつけな点、不勉強な点等深く御詫びすると共に、今後変わらず御指導いただけるよう、この場をお借りして、改めて御願いさせていただく次第である。

なお、当日の出席者は次のとおり。（五十音順、敬称略）

新井久保	新井孝雄	安保 康	今村隆一	今村佳英	池田清彦	石田正明
石川啓吾	伊藤正雄	伊藤 淳	伊藤弥寿彦	伊藤 武	伊藤達美	岩崎 博
上田康之	江本健一	江田 茂	奥田好秀	小沼孝行	大原昌宏	小栗太郎
小田義広	小倉直樹	大木 裕	小笠原隆	大桃定洋	奥村 尚	神垣匡伸
加藤忠男	笠原須磨生	川田一之	衣笠恵士	草間慶一	日下部良康	桑久仁雄
楠 嘉博	黒佐和義	小宮次郎	齊藤秀生	酒井 香	境野広行	沢田和宏
島本龍一	柴田泰利	下村 徹	塩崎容正	塩崎圭子	鈴木 互	鈴木恭一
須賀邦輝	妹尾俊男	高橋和弘	高桑正敏	田尾美野留	武智昭一	多比良嘉晃
津崎 満	露木繁雄	遠山雅夫	長尾 康	中込正男	中林博之	中村俊彦
新里達也	根岸秀夫	林 良一	林 聡	平山洋人	平井克男	古見義明
深町宗通	深町治広	福田惣一	藤田 宏	堀口 徹	本徳一彦	穂積俊文
松本俊信	松本忠之	森田誠司	山登明彦	安田幸夫	山本泰子	山上 明
山崎裕志	横島義弘	分島徹人	和田 薫	渡辺泰明		

第3回・名古屋支部例会記

穂積 俊文

昭和54年3月11日(日) 愛知県産業貿易会館

3月の第2日曜日は毎年例会を開催することになった。春は近く、今年の前定でわくわくしている人も、昨年採集標本を整理して見て貰いたい人も、この会合を楽しみにしていた。

今回は高桑正敏氏を招待し、また秋山黄洋氏が昨日佐藤正孝氏宅に泊り出席して下さって、総数23名が集まった。今冬は暖くて平地のカエデは一週間早く、満開だろうの声が上った。

当日の演題は

野平照雄：飛騨地方の主な甲虫類

高桑正敏：*Epania* 属について

であった。

飛騨の森林は深く、興味深い甲虫が多かった。しかし国有林が多く、皆伐方式で丸坊主の山となり、その跡に針葉樹が植林されて、まったく昆虫が少なくなったと野平氏は述懐された。カミヤコバンゾウムシがアザミの花の中に潜っている話や、トウキョウトラカミキリが細枝を集めた柴に集まる話など、採集のコツも面白く加えられて興味が深かった。

高桑氏は *Epania* 属の標本が少なく、確定的なことは言えないが、分類整理の必要があるだろうと各種の区別点や個体差など、色々と述べられた。

講演後の記念写真撮影や、持参標本を見ながらの虫談は熱が入り、楽しい一時を過ごした。例年のように、終了後の有志懇談会は、高桑・秋山両酒豪を迎えて早春の夜を楽しんだ。



出席者氏名(アイウエオ順)

秋山黄洋 石川 豊 井野川重則 岩崎 博 加藤正雄 蟹江 昇 河路掛吾
坂上光一 鈴木 功 杉山 勉 高井 泰 高桑正敏 竹内克豊 豊嶋亮司
野口善令 野平照雄 長谷川道明 別所正幸 細川浩司 穂積俊文 前嶋孝雄
湯沢宜久

第4回・名古屋支部例会記

穂積 俊文

昭和55年3月9日(日) 愛知県産業貿易会館

モンシロチョウの初見ニュースが入り、ぼつぼつシーズンが近くなって色々計画をねる時期になってきた。あいにく雨降りで19名の甲虫愛好者が集まったが、3名の遠来の客があつて賑やかだった。

講演：佐藤正孝氏、ネパール採集談

その他川原誠氏の「三重県の天牛相概略」や穂積のスライド供覧もあり、各自持参した標本を見せあつて和やかに終つた。

午後5時過ぎから初寿司で、支部庶務連絡係の井野川氏も加つて、有志13名が懇親パーティーを行つて愉快に散会した。

出席者

鈴木 功 高井 泰 岩崎 博 佐藤正孝 水谷高弘 川原 誠 河路掛吾
加藤昭見 坂上光一 平田滋宜 白井勝己 竹内克豊 湯沢宜久 齊藤孝夫
豊嶋亮司 穂積俊文 沢田佳久(京都府城陽市) 吉川 賢(米沢市) 石川 豊(松本市)

ELYTRA・さやばねの製本を予定されている方へ

「ELYTRA, さやばねもそろそろ総目次を作った方がいい……」というお問い合わせが増えてきましたが、ELYTRAの総目次はVol.10発行後(1982年)、さやばねの総目次はNo.10発行後(年度未定)に出したいと予定しています。製本するにはちょうどよい厚さになると思われますので、製本を予定されている方は総目次の発行までお待ちになった方がよいと思います。

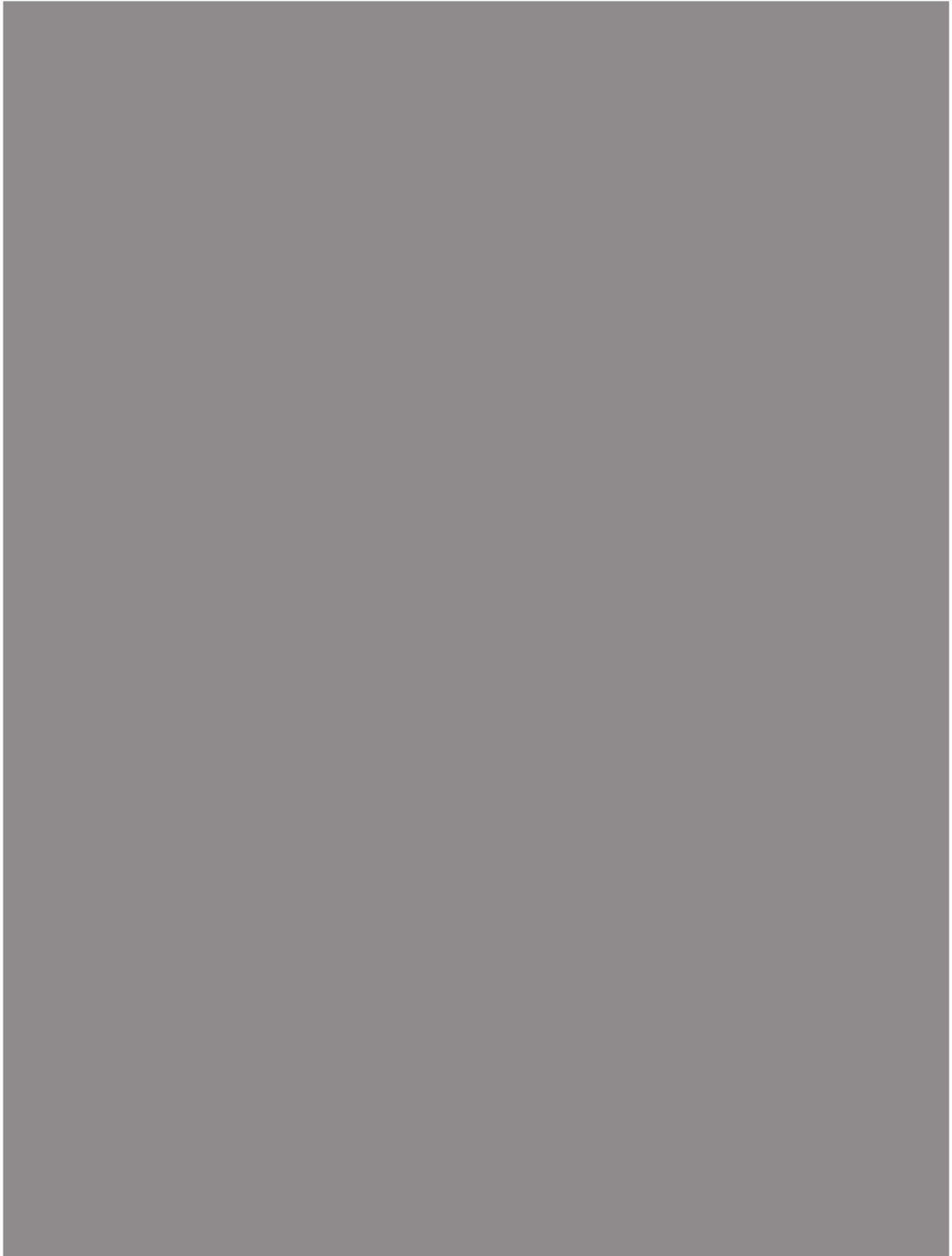
(編集部)

日本鞘翅目学会・会員動静

(1978年6月2日～1979年5月1日)

○新入会員

会員番号 氏 名 郵便番号 住 所







◦ 住所変更（新住所）





◦ 退会



◦ 認定退会：本会も創立から8年目を迎え、そろそろ長期会費未納者が目立ってまいりました。数回の通知にもかかわらず1980年5月1日現在、1978年度以前の会費を滞納されている方は残念ですが認定退会扱いとさせていただきました。

なお、復会には未納分の会費と入会金500円を必要とします。



◦ 寄付



○維持会員

※以上の方々から寄付金および維持会員会費をいただきました。御協力を厚く感謝いたします。

(会計)

会からのお知らせ・ご案内

昨年の第4回総会は平常通りに開かれましたが、ELYTRA、さやばねの発行がかなり遅れぎみになっていて申し訳ありません。今号で2回分の報告を済ませたのを機会に雑誌の定期発行を守っていきたいと思いますが、雑誌の編集にあたる人手がいなくて思うようにいきません。手つだって下さる方を募集いたします。

○日本産・台湾産カミキリ大図鑑の予定

こちらの方も発行が大幅に遅れていますが、日本産(講談社)の方は1980年5月1日現在で、プレート用の標本(大型ドイツ箱48箱に収納)を写真家の松香宏隆氏宅に置き撮影を始めています。台湾産の方は第4回総会席上で報告の通り日本産の後に発行することになりました。やはり大図鑑の発行というのは想像以上に大変なことで、当初の予定がだいぶ狂ってしまったことを会員諸氏に深くお詫びいたします。

○バックナンバーはすべて東京通販サービス社へ!

1980年度よりバックナンバーの発送はすべて東京通販サービス社に委託いたしました。バックナンバーのお申し込みは必ず東京通販サービス社の方へなして下さい。事務局の方では一切扱っておりませんので、絶対にお申し込みにならないで下さい。また、1980年度よりバックナンバーの学生割引はやめ(委託販売により計算が大変めんどろになるため)、一律料金といたしました。

「ELYTRA」Vol.1 №1, Vol.2 №1 & 2 (1973~1974年)	3冊組 ¥2,000 (〒160)
「ELYTRA」Vol.3 Nos1/2 「さやばね」№1 (1975年)	2冊組 ¥2,000 (〒160)
「ELYTRA」Vol.4 №1 & 2 「さやばね」№2 (1976年)	3冊組 ¥2,000 (〒160)
「ELYTRA」Vol.5 №1 & 2 「さやばね」№3 (1977年)	3冊組 ¥3,000 (〒160)
「ELYTRA」Vol.6 №1 & 2 「さやばね」№4 (1978年)	3冊組 ¥3,000 (〒160)
「ELYTRA」Vol.7 №1 & 2 「さやばね」№5 (1979~1980年)	3冊組 ¥3,000 (〒160)

○お申し込み先: 〒156 東京・千歳郵便局私書箱33号 東京通販サービス社

TEL 03(426)6012

郵便振替 東京0-73156

収 支 決 算 報 告

(1978年1月1日～1978年12月31日)

収	入	支	出
前期繰越	120,129	ELYTRA Vol.5 №2印刷代(残り)	169,700
入会金	19,000	ELYTRA Vol.6 №1印刷代	489,000
バックナンバー代	226,000	同別刷代	42,600
1978年度分会費	486,000	さやばね №4印刷代	110,000
1979年度分会費	318,000	同別刷代	3,700
1979年度以降分の会費	9,000	パンフ類コピー代	14,935
別刷代	42,695	写真代	11,740
広告料	43,000	送 料	178,350
預金利子	1,361	事務関係費	48,715
雑収入	1,750	第3回総会の食事代(130人分)	30,700
第3回総会の食事代	20,000	スリッパ代	13,600
(東京通販サービス社より)		雑 費	11,230
第3回総会会員外会場費	1,500	次期繰越	164,165
	1,288,435		1,288,435

(1979年1月1日～1979年12月31日)

収	入	支	出
前期繰越	164,165	ELYTRA Vol.6 №2印刷代	297,600
入会金	15,500	同別刷代	18,000
バックナンバー代	179,400	ELYTRA Vol.7 №1印刷代	262,000
1979年度分会費	323,500	同別刷代	16,000
1980年度分会費	129,000	パンフ類コピー代	10,000
別刷代	10,000	送 料	133,940
広告料	30,000	事務関係費	42,630
預金利子	405	第4回総会の食事代	16,285
寄 付	25,500	スリッパ代	4,900
第4回総会の食事代	20,000	次期繰越	107,515
第4回総会会員外会場費	900		
甲虫談話会より送料	10,500		
	908,870		908,870

さやばね №5 昭和55年6月20日発行

編集者：藤田 宏，齊藤秀生 印刷：岩峰社

発行所：日本鞘翅目学会(〒110 東京都台東区東上野4-26-8 福田惣一方)

より高度な蒐集・研究は文献から！

『世界の甲虫』〈新刊〉黒沢良彦監修 安田幸夫・岡島秀治著

B 5, 144頁, 662原図 特製版¥1,900 (〒240)

「世界のチョウ」の姉妹編で、中学生向けの図鑑として出版されたものですが、「世界のチョウ」同様、大人向けにコン色のクロスを用いた特装版として1000部限定発行されたものです。

本書には、世界の主要な大型種、美麗種、形態・生態の変った種など、比較的標本としても入手しやすい、27科、662種が美しい原色の写真と図で、オサムシ科からゾウムシ科までを系統的に、その分布や特徴などとともに紹介され、世界の甲虫を扱った図鑑では最も収録数の多いものとなっています。

また、すべての種に和名が記され、いままで和名の無かったものには新和名が与えられています。巻末には、学名と和名とを対応した索引があり、各甲虫愛好者には、是非一冊お勧め出来る本と言えます。

『日本産甲虫目録』

第1集 1～7 黒沢良彦・中根猛彦・佐藤正孝(甲虫談話会)著

(クワガタムシ、クロツヤムシ、ハンミョウ、ホソガムシ、マルドロムシ、ヒラタドロムシ各科) B 5, 26頁 7冊セット ¥800 (〒120)

第2集 8～14 大平仁夫・佐々治寛之・佐藤正孝(甲虫談話会)著

(ドロムシ、ヒメドロムシ、ダエンマルトゲムシ、コメツキムシ(1)、ミジンクスイムシ、ホソカタムシ、カクホソカタムシ各科)

B 5, 28頁 7冊セット ¥800 (〒120)

第3集 15～17 野村 鎮、小林裕和・林 匡夫・木元新作(甲虫談話会)著

(コガネムシ(1)、カミキリムシ(1)、ハムシ(1)各科)

B 5, 29頁 3冊セット ¥900 (〒120)

ご注文はハガキに署名捺印の上(満18才未満は保護者印)ご注文下さい。直ちにお送りいたします。代金は到着後5日以内にご送金下さい。送料は2冊以上になると安くなります。又1回のご注文に¥200の書留料を加算いたします。(但し前金不要)

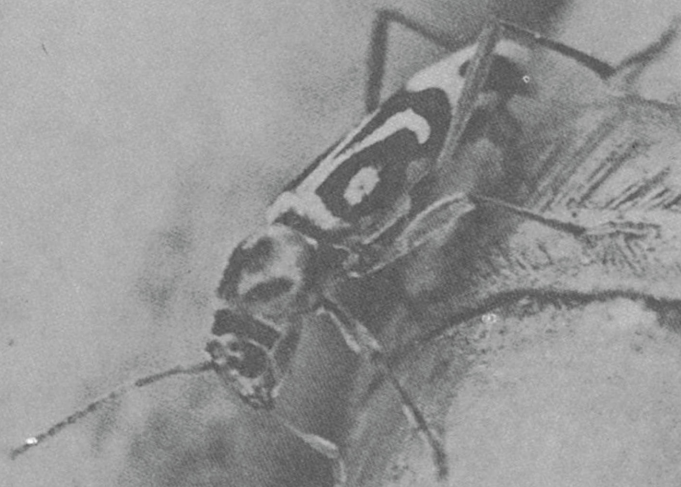
お近くの方は小社(小田急経堂駅前)へ！ 昆虫関係図書
常時4,000タイトル以上在庫 水曜祭日定休・平日10～19時・
日曜13～17時 JCBカード加盟店 在庫リスト(3回分¥200)

昆虫洋書・地方図書は専門の小社へ
東京通販サービス社
〒156 東京千歳郵便局私書箱33号 小田急経堂ビル12F1221号
☎ (03) 426-6012 郵便振替 東京0-73156

株式会社

志賀昆虫普及社

〒110 東京都渋谷区渋谷1丁目7番6号(宮益坂上)
TEL. 03(409)6401(代) 振替/東京21129



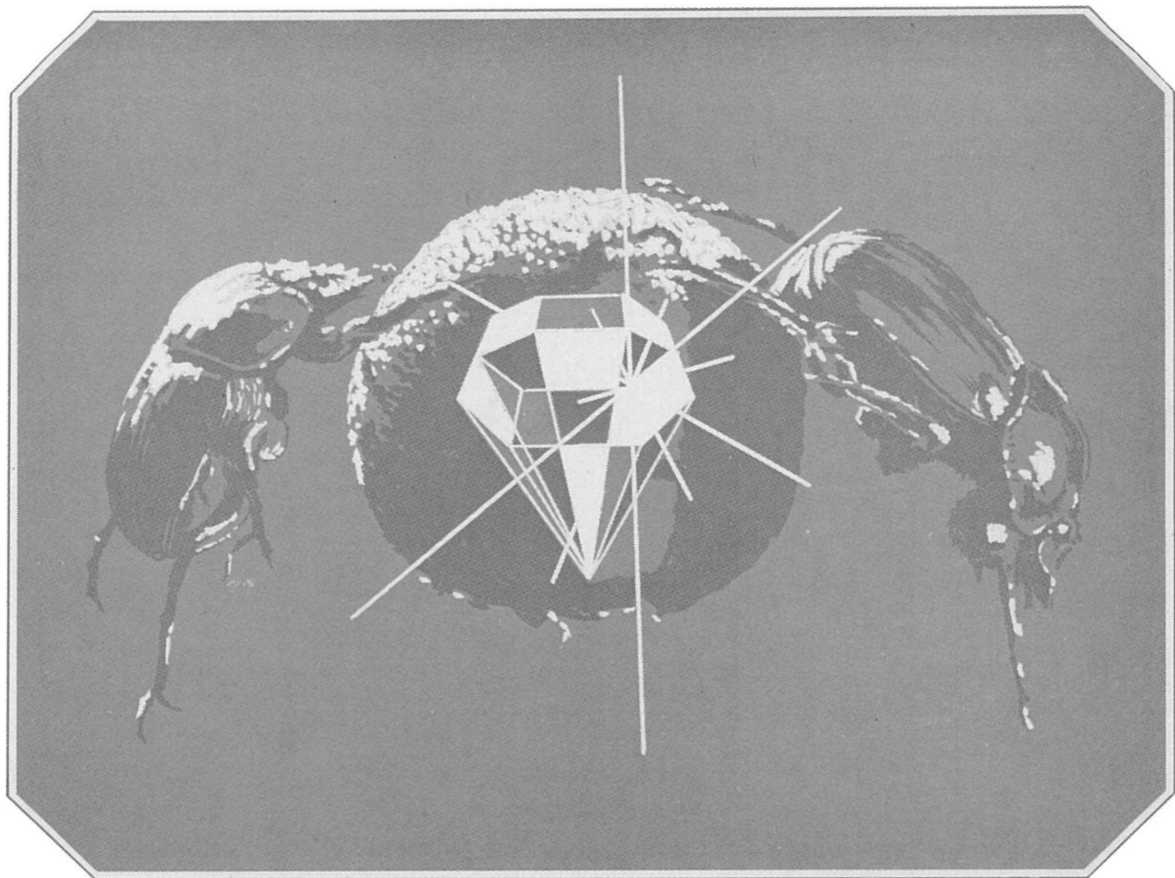
●新製品/最上質ステンレス製シガ有頭昆虫針
0. 1. 2. 3. 4. 5号発売中

●専門用カタログあり 要郵券 140円

営業種目 採集瓶・採集箱・幼虫胴乱・採集バンド・展翅板類・
飼育用具・顕微鏡・標本箱各種・三角ケース・捕虫網・標本瓶・植
物採集用具・殺虫管・プレパラート製作用具・名箋・ピンセット・
平均台・液浸用管瓶・ルーペ類・コルク類・その他

営業時間：9時～18時

休 日：毎日曜，祝祭日，10月1日



真珠より美しく ダイヤより価値がある 大切な標本を永久に守る 《ドイツ型標本箱》

自然はますます大切なものとなってきました。この不思議な世界を解明する貴重な手掛りとなる昆虫標本は、価値あるものとして永久に保存したいものです。

そんな願いをこめて、タツミ製作所では、昆虫標本の保存に最適なドイツ型標本箱をお届けします。

*すばらしい特長

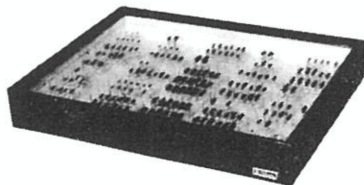
- くるいのこない良質な木材を使用
- 湿気や乾燥にも強い独特の構造
- パラゾールにも変化せず、標本がより美しく見える白色プラスチック底

●高級ニス塗装の丈夫で美しい仕上げ

※標本箱のほか、展翅板など昆虫標本作成に必要な器材もあります。昆虫器材カタログ、昆虫関係輸入図書・委託図書リストもあり。

〒113 東京都文京区湯島一丁目二番五号（三三八一）四五四七
郵便振替 東京一三三七九

（有）タツミ製作所



大型
4,500円(送料別)

中型
4,000円(送料別)

この価格は昭和51年4月現在のものです